

GOLDEN THIRTEEN

モルダウ河の淡い影
山口光一

モルダウ河の 炎影

山口光





モルダウ河の淡い影

●
著者・山口光一

一九九二年六月十五日 初版

発行者・平松一郎

発行所・株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一―五 郵便番号一六二

電話・東京（〇三）三二六八・八二三一（代）

振替・東京六一一五六五

印刷・暁印刷

製本・鈴木製本

乱丁、落丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kouichi Yamaguchi 1992, Printed in Japan

ISBN 4-488-01247-7 C0093

モルダウ河の淡い影



萩尾栄はシュトウツガルト発の夜行列車がプラハ駅の構内に滑り込むと、同室の乗客たちが降り切るのを待って、ゆっくり席を立った。

チェコの車輛は、西側のものに比べて二割はよけいに乗客を詰め込むので、席が手狭だった。そのうえ、国際列車とはいふものの、チェコ領内に入れば首都へ向かう数少ない列車となるため、シエブあたりから乗客が増え始める。微睡みと覚醒を繰り返すうちに、気がついてみると通路まで旅客に占領されていた。

萩尾は荷棚からトランクを降ろすと、昇降口の周りに群がる乗客たちの後に尾いた。

昨夜はほとんど眠れなかった。

一年ぶりのチェコ訪問で気持ちが高揚していなくもなかったが、むしろ東独領内を通過する際に、深夜であったにもかかわらず異様に厳しい検問を受けて緊張を強いられたためだった。たかがトランジットビザを発給するのに、車掌ばかりでなく国境警察官や自動小銃で武装した兵士までが列車に乗り込んできた。西側の外国人の場合、旅券にチェコ側の入国査証があるかどうかを確かめるばかりでなく、入国目的や職業までしつこく問い質された。中にはトランクを開けるよ

うに要求された米国人もいた。そうした東独官憲の高圧的な姿勢に神経を苛立たされ、眠りが妨げられたのだった。

明け方にふと目を醒ますと、演習に向かうらしい戦車隊が朝焼けの草原を移動していくのが、車窓からはるか彼方に望まれた。

ブラットホームに降り立つと、明るい夏の日差しが軽い旅の疲れを癒してくれた。一九六八年のチェコは他の東欧諸国とは異なっており、たしかに明るさに満ちていた。

昨年、大使館員でもなければ貿易商でもない萩尾が二十年ぶりにチェコを訪れることができたのは、ひとえに「プラハの春」と呼ばれる時代の変化のお蔭だった。

萩尾が編集長を務める〈音楽と芸術〉誌では、数年前より西欧諸国の管弦楽団紹介の連載を続けてきた。これが予想外に好評だったため、東欧を対象にした続編が企画に上った。長い間忘却の淵に沈んでいた、というより意識的に沈めていた戦時中の記憶が、静かに、しかし緩慢ながらもしだいにはつきりとした輪郭をもって萩尾の内部に浮上し始めたのは、この時であった。

チェコフィルハーモニー常任指揮者のフリッツ・アンチェルは、萩尾の手紙に驚くほどの早さで応えてきた。〈音楽と芸術〉誌の企画には関心があり、要望のあった資料は楽団事務部より別に送らせるという短い文面だったが、末尾の添え書きが萩尾の関心を惹いた。もし取材目的でチェコを訪れる意志があるなら招待状を書く、と記されていたのだ。

折しも新聞等にチェコの民主化への動きがちらほら紹介され始めていた。ひょっとするとビザが下りるかもしれないという萩尾の期待は裏切られず、アンチェルの二信目の手紙に添えられた招待状は、この社会主義国への重い門戸を開いたのだ。

萩尾はルーマニア、ブルガリア方面へ向かう列車に乗り換える乗客たちを横目に眺めながら、

駅のフロアの方へ足を進めた。昨年はモスクワ経由の航空機でやって来たため、プラハ中央駅に降り立つのは、昭和二十一年にドイツ人引揚者の群れとともにチェコを去って以来のことだった。ドイツ占領軍に徹底的に破壊されたワルシャワとは違って、プラハの街の大部分は戦災を免れていた。この駅もそうなのだが、戦後共産政権によって建て直されたくしく、ホームを覆う天蓋を除けば、もはやかつての面影はどこにも残っていない。ガラスをふんだんに用いて輝くばかりの光にあふれた正面フロアでは、がらんとした空間に、螺旋階段や待合用の長椅子、掲示板などが斬新な曲線を交錯させ、行き交う人々の表情にも明るさが見受けられた。が、どこかに東側の翳りを引き摺っているのも、また事実だった。

駅前で路面電車に乗ろうとしたが、すぐに気が変わって歩き出した。昨年の来訪の際には、プラハ市内の路面電車の幾つかが戦時中と同じ路線番号を掲げて走っているのに驚き、喜んだものだった。目的地まで歩いて三十分とはかからないはずである。

殺風景なビルの合間を抜けて、市の中心部へ向かった。電車の軌道を敷設した大通りを二つ横切ると、ヴァツラフ広場へ向かうメインストリートに出た。国営旅行社やアエロフロート航空、ソビエトの都市名を屋号とした百貨店や商店、それにレストランなどが軒を並べていた。

建物の並びの彼方に聳える火薬塔の方角に足を向けた。それは文字通り中世に火薬貯蔵庫として使われていたことに由来する塔で、ちょうど街の臍の部分に位置していることから、名所として市民に親しまれている。

塔というよりは城門といった趣の土色の石造建築の真下に通じる道を歩きながら、萩尾はふと、昨夏以来目まぐるしい一年だったな、と思った。

取材目的であった前回の訪問の当初には、まさか十五年も勤めた音楽出版社を辞めることにな

るとは考えてもみなかった。しかしいったん思い立つと矢も楯もたまらず、友人でもある社長の慰留もきかずに決断してしまったのだ。

大学を出たばかりの一人息子京一が理由を深くは尋ねずに理解を示してくれたのが何よりだったが、先の見通しも立てずに退職してしまったのはやはり無謀と内心では思っている様子だった。毛皮や民芸品を売るこぢんまりした店の並ぶひっそりした小路を抜けると、スタロメツケ広場に出た。

エレキを手にした数人の若者が広場の一角で西側の軽音楽を演奏し、通り掛かりの人々がそれを遠巻きに囲んでもの珍しそうに聞き入っていた。「ブラハの春」が民衆の間に滲透し始めたことの表れでもあるかのようなようだった。

ティン教会の前で足を止めた。まるで神との魂の合一を渴望する人々の願いの象徴でもあるかのように無数の尖塔を空へ突き立てたケルンやミラノのドーム、玉葱状の屋根を特徴とするロシア正教会、その両者の様式の間形式でもあるかのようなティン教会の緩やかに尖った双子状の塔が、青い空にそそり立っていた。

萩尾は塔の背後を流れゆく白い雲をしばし眺めた。

ドイツ軍占領下のプラハで、幾度この教会を仰ぎ見たことだろう。暗く鬱々とした鉛色の空に閉ざされた日々だった。神の存在すら疑った市民も少なくなかった。

中国での戦争が泥沼化し始めた頃、萩尾は上野の音楽学校を卒業し、ただちにベルリンのムジークホッホシューレ（音楽単科大学）に留学、その後仮契約ながらもチェコフィルの専属となり、ピアニストとしてスタートしたのがこのプラハの地だった。

広場を反対側に抜けると、かつてのユダヤ人居住区は間近である。昨年、チェコフィルの現状

視察と取材を終えた後、ドヴォルザーク・ホールに近いせいもあってたまたまこの地区を訪れたことが、萩尾の人生を一変させてしまうなどとは、まったく予期せぬことだった。

モルダウ河に架かったマーネス橋を横目に見ながら電車通りを渡ると、シナゴークとそれに隣接する墓地を取り囲む樹立が前方に見えてくる。枝をいっぱいに広げた木々は、夏の太陽を浴びて鮮やかな緑の樹葉を繁茂させていた。

昨年ここを訪れたのは気紛れ、というよりも単なる偶然だった。しかし今年は明確な意志をもってやって来ていた。

ユダヤ教会の鐘の音が響いた。辺りの静謐に融け合って聞こえてくるその音に曳かれるようにして歩いていくと、中世以来の墓標の林立する墓地が左手に広がった。墓参の人の姿がちらほらした。墓標の群れから若いラビが現れて、萩尾と擦れ違っていた。

ダビデの星の刻印を掲げたユダヤ人協会は、墓地がし字型に折り曲がる括弧^{くわく}目^めのところに建っている。

協会事務所横の階段を昇った。その二階は、訪問者が自由に立ち入りできる展示室になっており、百枚近い児童画がガラスケースに納められている。

昨年の夏、萩尾に昭和十九年五月のあの日のことを鮮烈に思い出させたのは、この児童画だった。

見学者に入り交じってケースに見入ると、胸の中にふたたび熱いものがこみあげてきた。

題材は様々だが、お伽の国や家族団欒の光景を子供らしい空想や祈りを籠めてクレヨンで描いた図画が多く、ごくまれに日々の暮らしを絵にしたものもあった。

図画の下には、絵を描いた子供の名前と生年、そして死亡月日が紹介されるか、あるいは作者

不詳の旨が記されている。昭和四年から十二年くらいの間に生まれた様々な年齢の子供たちだが、死亡したのはみなポーランドのオシビエンチムで一九四四年の五月、または十月の特定の日付になっている。

その死亡場所と日付が一定しているという事実が、帰国後、心に重くのし掛かり始め、鉄の扉の背後で闇の中に消えていった子供たちの叫び声が耳から離れなくなり、ユダヤ人協会との幾通かの手紙のやりとりの後、とうとうこの地をふたたび訪れることになってしまったのだ。

展示室を一巡すると、階段を下りて協会事務所の戸を叩いた。

ややあつて中から見上げるほどの長身瘦軀の男が出てきた。目や鼻に一見してユダヤ系と判る特徴があつたが、萩尾より五、六歳は上であらうと思われる風貌にもかかわらず、この年配のユダヤ人が必ずといつてよいほど蓄えている顎鬚を、その男は生やしていなかった。

男は相手が東洋人であることを知ると、親しげに声を掛けてきた。

「萩尾さんですね」

到着のおおまかな予定は知らせておいたのだ。

「フロムさんで？」

「そうです。ようこそお越し下さいました」

フロムは握手を求めて手を差し出した。

応えようとして右手を出しかけ、フロムの濃紺の背広の右袖がだらりと垂れ下がっているのに初めて気づいた。手紙の末尾の署名がほとんど文字の体をなしていなかったことに合点がいった。萩尾は両掌でフロムの左手を握り、不器用に握手した。

フロムの表情に微笑が浮かんだ。

「皆さん、握手の際に一瞬当惑なさいます。ゲシュタポに切り取られたのが左手の方だと良かったんですが」

フロムは萩尾を中へ招き入れた。

「では、戦時中に腕をなくされたのですか？」

「そうです。でも命を喪^うなより、はるかに幸運でした。チェコにいたユダヤ人三十六万人のうち、戦後まで生き延びられたのは、たったの四万人に過ぎません。その大半はパレスチナへ去って行きました」

萩尾はデスクの上の年代物のタイプライターにしばし視線を落とし、それから顔を上げた。

「イスラエルには行かれずにお残りになったのは、やはりここの記録を伝えるためですか」

「そうです。あの時代を経験した誰かが、その役割を担わねばならないのです。当協会は占領時代のユダヤ人に関する記録を、戦後一貫して保存公開する仕事に携わってきました。ですからお便りを拝見したときには、正直言って驚きもしましたが、嬉しさが先に立ちました。テレジン収容所の子供たちの絵に関心を持って下さる方が東洋から現れるとは意外でしたが、あの絵には見る人の魂を揺さぶる力があるのです」

ドイツ人たちがテレジンシュタットと呼んでいたプラハ郊外テレジン収容所で、終戦直後に発見された児童画を画集として出版したいという萩尾の願いに、フロムは最初から好意的だった。

プラハのユダヤ系出版社で印刷製本してほしいという協会側の条件に当初は困惑したが、考えてみればそのほうが都合かもしれない。日本語の文章を印刷できない以上、日本での刊行は諦めざるをえなかった。しかし英文の序文や解説を付けて欧米の出版ルートに流せば、はるか

に広汎な読者の目に触れることとなる。それこそ萩尾の意図するところだった。

初版三千部の予定が、出版規模に合わせてその四倍にも膨れ上がった。資金を調達するために、勤めを辞めて退職金を手に入れた。採算は最初から度外視していた。京一はすでに大学を終えている。自分一人のことなら、もう一度人生をやり直すだけの若さはまだ残っているつもりだった。「条件をつけたことについては申し訳なく思っています。お申し出について私どもで検討した結果、絵を長期にわたって外国に貸し出すことはできないという意見が強かったのです。何しろ貴重なものですから、搬送途中で紛失したり、事故に遭ったりしたら取り返しがつきません。また、こちらの系列の出版社をお使いいただければ、その利潤から一定の割合が協会に還元され、それは結局私どもの事業を支援していただくことにもなります」

「ごもっともです。それについては手紙でお返事したとおりで、序文については、英語のものを作り信頼の置ける米国人に見てもらってありますし、費用のほうはすでにシュトゥットガルトの銀行口座に納めてありますので、いつでも小切手で振り出せます」

「出版社のほうへは電話で連絡しておきます。アドレスをお教えますから、明日にでも行かれるとよろしいでしょう」

「ではさっそく、絵の抽出作業にかかりたいのですが」

フロムは萩尾の熱心さに敬意の籠った微笑で応じて立ち上がった。隣室に案内された。

戸棚の開き戸の鍵を外し、フロムは黒い布に包まれた三束の絵画を取り出し、円形のテーブルの上に置いた。フロムは絵を束ねた麻紐を片手で器用に解きほぐした。

「テレビジョン収容所が解放されたときに発見されたのは、これと上に展示されているものすべてです」

「一枚でも多くの絵を収録したいのですが、ページ数に限りがありますし、個々の絵をあまり小さく印刷すると訴えかける力が弱まります。ですから取捨選択は已むを得ないところですが、しかしそうは言っても、必ずしも二階に展示されているものばかりにはしないつもりです」

「良いお考えです。私どもでも絵の巧拙ばかりを基準に展示するかしないかを決めたわけではなく、むしろ画用紙や絵の具の保存状態から判断したものもあります。画集出版で、これらの絵の中からさらに多くのものが陽の目を見れば、こんな喜ばしいことはありません」

フロムは、二階の展示室は五時に閉館になり、その三十分後に事務所を閉めるが、それまではここで作業していて構わない、その後は協会のゲストルームに宿泊できるように手配しておくから、帰り際に声を掛けるようにと告げ、ごゆっくりと言いつつ残して出て行った。

一人になると、萩尾は絵を一枚一枚丹念に眺めた。部屋が薄暗いことに気づいたが、室内の質素な佇まいに電燈を点すことが憚られた。高いところに採光用の窓が設けられていたが、そこから投げかけられる光は、部屋の奥深い部分には届かない。

三百枚はあると思われる児童画には、展示室のものよりさらに豊富な情景が描かれていた。

子供たちの遊び、愛玩動物、学校の教室、両親の肖像や自画像……。ドイツ軍進駐以前の日々の暮らしを、記憶を頼りに描いたものが圧倒的に多い。

採用、不採用、どちらとも決めかねるものの三段階に絵を選び分けていった。作者不明のものが多かったが、判明しているものについては、裏面に名前と生年死亡月日のデータが記されていた。

約半分を見終わると、さすがに疲れを覚えた。

図柄の似たものが出てくると、決定済のものを見返し、比較しては迷うことの繰り返しになった。

た。それでも神経を集中させ、判断を誤るまいと努めた。

やがて何ということもない出来栄えの一枚の絵を手にして、急に得体の知れない奇妙な感情が胸の中に噴出するのを憶えた。自分でもわけが分からなかった。

谷間に充滿した黯い霧の中を彷徨^{さまよ}っているような、厭な気分^{きぶん}に捕らわれた。もどかしい気持ちを抑えながら、問題の絵を眺め回した。

手掛かりはすぐに見つかった。

絵の右下にあった消えかけたサインの最初の「J」の文字が、遠い記憶のどこかに繋がったのだ。

絵を裏返してみる。やはりそれはヨナス・ザナチュクが描いたものだった。裏面には、『ヨナス・ザナチュク（一九三三年三月十日―一九四四年五月二十三日、オシビエンチム）』と記録されていた。

ひょっとしてイローナの描いた絵もあるかもしれない。そう思って、残りの絵の裏側を見ていたが、イローナ・ザナチュクの名は発見できなかった。

あらためてヨナスの絵に見入った。

巧い絵ではなかった。たぶん不採用の側だろう。だが描かれた情景は、萩尾を徐々に、しかし確実に戦時中の記憶の中へ後戻りさせた。

テーブルのケーキを前にして座っている子供たちは、ヨナスとイローナに違いない。その背後にいるのは、この双子の母親で、半開きのドアから顔を覗かせている大男はザナチュクであろう。そして部屋の隅でピアノに向かっていている眼鏡をかけた男こそ、萩尾自身のはずであった。

ノックの音が、ふたたび一九六八年八月の現実^{げんじつ}に引き戻した。

フロムが顔を出し、閉館時間であると告げ、萩尾のために用意したその夜の宿所の場所を教え

た。明朝九時に開館するが、それまでテーブルの上はそのままにしておいても良いとのことだった。

外へ出ると、日暮れの憂愁が迫っており、肌寒くさえあった。

足が自然に西の方角へ向いた。

じきに河の畔へ出た。ドヴォルザーク・ホールも国民劇場も夏のシーズンオフで、ヨーロッパのたいていのコンサートホールと同様に休館していた。

川沿いにカレル橋の方へ歩いていった。

モルダウは水量を減らしながらも、翡翠色の水を滔々と下流へと押し流していた。川面のいたるところで、鷺が心地よさそうに群れ泳いでいる。十二人の聖者の像を欄干に突き立てたカレル橋から対岸の丘の中腹の王宮へと視線を移しながら、萩尾はプラハでもっとも美しいといわれる景観に眺め入った。

フワンという警報音で振り向くと、路面電車が萩尾の背後を通り過ぎて行くところだった。車輪の軋む音を残して電車が過ぎ去ると、大通りの向こう側の舗道に目を留めた。

まさか、と思った。

萩尾の視線は舗道に行く一人の女に釘付けになった。鞆しのよい暗緑色の華奢な革の上衣、ほぼ同じ色調の鍔の広い帽子、ブロンドよりやや褐色味を帯びた長い髪が萩尾の目に映った。

ミレナだ。

慌てて通りを渡ろうとした。が、ちょうど幾台かの自動車がかなりの速度で走って来た。もどかしい気持ちで向い側の舗道を見やると、ディーブグリーンの鍔広の帽子がどんどん歩み去って行く。

ようやく車の列が途絶えて、通りを横切った。女の背後に追いつく。軀つきや、肩、それに細い腕の線は間違はなくミレナのものであった。胸が高鳴った。

「バルドン」

萩尾が声をかけた。

女は立ち止まり、振り向いた。年配の東洋人を見て、表情に怪訝な色が広がった。

一瞬言葉を喪った。ミレナとは似ても似つかない卵形の顔が、何の用だと言わんばかりにこちらを見上げている。

「大変失礼しました。知人と間違えたんです」

頭を下げると、女はくると背を向けて歩み去った。

女の後ろ姿をしばらく見送りながら、萩尾は羞恥の感情に捕らわれた。

ミレナであるはずがなかった。

彼女は第二次世界大戦中に死んだのだ。仮に生きていたとしても、あんなに若い風貌を保っている由もない。

萩尾は川風に吹かれながら、波立っている感情を鎮めようと、大きく息を吐いた。

宵闇が迫っていた。陽はとうに沈み、そこかしこに家路を急ぐ人々の姿があった。

川沿いの道を北の方へ歩いてゆき、指定されたゲストハウスを見つけた。戦前からの古い建物の外壁だけを塗り直したもののようだった。呼び鈴を鳴らすと、中からかすかにジーという音が聞こえ、ドアが開いた。